

掛川市史編さん委員会編集
平成九年九月 静岡県掛川市発行

掛川市史上巻

第二章 原始の掛川

第三章 和田岡古墳群と素賀国

第二章 原始の掛川

第一節 掛川文化のあけぼの

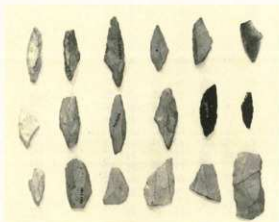
(1) 人類文化のはじまり

日本列島に人類が住みはじめたのは、約三〇五万年前とされてきたが、最近、東北地方で約三〇万年前と少なくとも五〇万年前とかいわれる古い石器の発見が相次いでいる。その発見地は、宮城県北部地域に集中しており、築館町上高森遺跡では、直径二〇センチメートルの皿状のくぼみに、ハンドアックス（握り斧）などの石器六点が、まとめて入れられているのが見つかっている。年代は約六〇万年前といわれている。

一万数千年をさかのぼる古い時代を、地質学では更新世（洪積世ともいう）といい、考古学では旧石器時代と呼ぶ。この時代の道具としては、主に打ち欠いただけの石器しか発見されていない。それを旧石器と呼び、形・種類・大きさ・作り方などの年代的な変遷過程が明らかになりつつある。

磐田原台地の上に堆積している赤土層の中からも、たくさん旧石器が見つかっている。次ページの写真はその一例で、特徴となる石器は、ナイフ形石器と呼ばれる、小型のナイフの形に仕上げたものである。ナイフとして使ったり、槍の穂先にしたと考えられている。これらは、約二万年前のもので、旧石器としては新しい段階のものである。

旧石器時代に生きた人類が、どんな体形でどんな顔つきをしていたか、あまりよく分かっていない。引佐郡三



山田原遺跡のナイフ形石器（袋井市教育委員会提供）

ケ日町只木の石炭岩採石場で見つかった三ヶ日人の化石は、成人男性二体、成人女性一体、計三体分で、男性人骨から割り出した身長は一五〇センチ前後とされている（（鈴木尚他「三ヶ日人と三ヶ日只木石炭岩採石場」の化石石原「人類学雑誌」第七〇巻第二号））。また浜北市根堅遺跡で発掘された浜北人の成人女性は、身長一四三センチと推定され、頭蓋骨の形状から世界の化石人骨の中では、もっとも新しい新人（ホモ・サピエンス）の仲間に入るといふ（（鈴木尚他「浜北人と浜北根堅遺跡」の化石石原「人類学雑誌」第七〇巻第二号））。東北地方で見つかった

古い段階の旧石器を作った人類については、岩手県北上山地でその探索が始まったばかりである。

ア 掛川の旧石器時代

掛川市地域では、まだ確実な旧石器は見されていない。原里の仲屋栄一は、上ノ段遺跡から出た大量の頁岩の剝片を旧石器と考えているが、まだ多くの賛成を得ていない。一般に旧石器時代の遺跡は、磐田原台地や武蔵野台地のような広い台地面や愛鷹山・箱根山・八ヶ岳といった火山の裾野に展開する緩やかな丘陵面に営まれている。吉岡原・高田原・岡津原などの台地も、古い天竜川の河川堆積物からなり、磐田原と同時に段丘となった台地であるから、旧石器時代の人類が、この丘にやってきても不思議ではないが、今のところその確証はない。

三ヶ日人や浜北人の化石と一緒に掘り出された動物化石の中には、アオモリゾウの牙、オオカミやトラの下顎骨、オオツノジカの角と骨、ノウサギ・ニホンジカ・イノシシ・サルの骨などがある。この内、アオモリゾウ・トラ・オオツノジカは、一万数千年前に日本列島から絶滅した動物である。こんな動物たちがこのあたりを歩いている情景を想い浮かべてみてはどうだろう。当時の自然環境を復元するのは大変困難であるが、今日よりも年平均気温が六〜七度低かったといわれ、海面は現在より一五〇メートル以上低下していたという。したがって原野谷川や逆川の流域はもっと深い谷となっていただろう。

和田岡と原里堂山遺跡から採集された槍先形の石器二点が、今のところ掛川市地域最古の人類遺産である。上の写真がそれで、右は昭和三五、六年ごろ和田岡の庵の下で茶園改植の時、小学生が見つけた。後年袋井市在住の



市内発見の槍先形石器
(右足立順司、左仲屋考古資料館蔵)

足立順司の手に渡った石器で、硯岩という緻密な石が使われている。先端が少し欠けていて現存長さ八センチ、最大幅二・六センチである。左は、原里の仲屋栄一が同氏宅東方の丘陵上、堂山で採集されたもので、長さ五・二センチ、幅二・一センチ、厚さ〇・六センチの完形品である。両石器は、基部の作りに違いはあるが、矢の先につけるやじりにしては大きすぎるので、槍の先に付けて狩りをする道具であったと考えられている。こうした形の石器は、旧石器と比べて



萩の段遺跡の押型文土器（原里）

作りが精巧で、年代も約一万三〇〇〇年前とされており、旧石器時代から次の縄文時代への過渡期に位置する。当時の人々の具体的な暮らしぶりを、これだけの資料で推しはかることはできないが、気候は以前と比較して上昇しつつあったとはいえ、なお冷涼だったと考えられている。ゾウやオオツノジカといった大型獣は絶滅したか、絶滅寸前の状況だったと思われる。道具にしても、同時期の他の遺跡では槍先というより、やじりとした方がいい例も含まれていて、そろそろ槍から弓矢への転換が図られていたようにも思われる。

イ 市内最古の土器

寺島萩ノ段遺跡や八坂向畑遺跡から、押型文土器と呼ばれる土器の破片が発見されている。上に示したものがその一部である。破片が小さいうえ、風化が進んでいて模様も分かりにくいですが、右上・右下と中の下のように格子目のもの、中の上と左のように山形のもの、二種が認められる。こうした模様は、直径三ミリの筒状のものに、格子目・山形・楕円を刻みつけ、その円筒状の施紋具を器面に押しつけながら回転させた結果、刻みの模様が反転されてきた模様である。そこで、こうした模様の土器を回転押型文土器と呼び、約八〇〇〇年前に中部地方以西に広く流行したことが知

られている。掛川市内では最古の土器である。

日本列島で土器が作られたのは、約一万三〇〇〇年前といわれているから、こうした押型文土器は、更に五〇〇〇年ほど新しいのであるが、遠江地方では古い土器が少なく、貴重な資料となっている。これらの土器には縄文と呼ばれる模様はないのに縄文土器と呼ぶ。縄文土器は、東京都大森貝塚で我が国最初の貝塚発掘が行われて以来、関東地方の貝塚から出てくる土器に縄目を付けたような模様が多かったので、縄席紋とか縄紋の名が付き、いつしか縄紋土器と呼ばれるようになったが、縄紋のない土器も広く日本列島に存在することが分かっていた。しかし、既に縄紋土器の名が定着し、それが時代の呼び名にもなってしまうていたので、縄文時代の土器をすべて縄文土器と呼んでいるのである。戦後は、縄紋よりも縄文と書く方が多くなった。

土器の発明は、弓矢の発明と並び、旧石器時代から縄文時代へ移行する過渡期の大発明といっている。弓矢については次項で取り上げるとして、土器の発明について考えてみよう。こんにち、土器や陶器はいろいろな用途に使われるが、最初はおっぱら煮炊きの器であった。旧石器時代人は土器を知らなかったから、焼くか焙るかしない限り、生食するはかなかっただろう。縄文人は、土器で煮炊きができたので、食料にできる食材の範囲を大幅に拡げることができたし、汁の形で飲むこともできた。栄養化への効率も格段に上がったことであろう。しかし、土器発明の最大効果は、アク抜きが可能になったことだといわれている（『縄文時代の経済と文化』、2巻）。

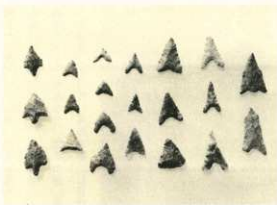
渡辺誠によると、縄文人の主な植物食料は、ドングリ類、クリ、クルミ、トチなどの木の実であるが、シイの仲間を除くドングリ類とトチの実は、多かれ少なかれアク抜きしないと食べられない（表1参照）。トチの実には煮

沸しただけではアクが抜けず、灰汁で中和する必要がある。そのアク抜き技術は遅れて会得されたようである。ドングリ類のアク抜きは、水晒しだけで済むものもあるが、煮沸してから水に晒すとよくアクが抜けるといふ。

旧石器時代の遺跡は、静岡県内の場合、愛鷹・箱根山麓と磐田原台地（それも西縁）に偏在するが、縄文時代の遺跡は、時期により若干の分布の偏りはみられるものの、ほぼ県内全域に満遍なく分布している。アク抜き技術が普及すれば、どこにも住みつくことができるわけで、土器発明の効果とだけ評価することはできないが、その恩恵の大きかったことは確かであろう。

ウ 縄文人の道具と食料

畑仕事をしたり、工事現場に行き合わせたりしたときに、一寸気を付けてみると、ふだん見慣れないものが目に止まることがある。雨あがりの朝畑の表面に気を配ると、ピカリと光る石片に出合うこともある。榛原郡御前崎町には、「星の糞」と呼ぶところがある。夜空の星が欠け落ちて光っていると、昔の人が思ったのであろう。いまでも、その場所へ行ってみると、黒曜石の破片が落ちていた。黒曜石は、ガラスに似た黒色の火山噴出物で、濡れると光を反射する。これが星の糞の正体であろう。古い時代に使われた物は、長い年月の間に土中に埋没する。水に運ばれた土や粘土で埋まった場合が多いが、ミミズのような生物が、糞といっしょに地表に押し出した土が、長年の間にこうした古い物を埋めてしまったという説もある。また、火山灰や塵が風に運ばれてくることもあったであろう。

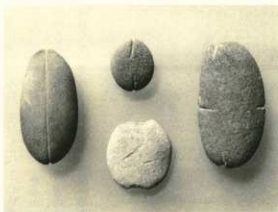


上ノ段遺跡の石鏃（仲屋考古資料館蔵）

農作業や工事は、そうして土中に埋没した古い時代のもの（これを以下、遺物と呼ぶ）を、地表に掘り出すことになる。木や骨で作ったものは、あらかた腐朽してしまい、石で作った道具類や土器片が地表に散乱し、降雨に叩かれて人の目に触れる。そうした遺物に関心を持つのは、多くの場合少年である。遺物の収集癖が昂じて年月を重ねると、遺物の山ができ、部屋が遺物でいっぱいになる。そうした収集家の存在は、県内各地に知られている。

原里の仲屋栄一もその一人である。仲屋氏は、昭和七年ごろから、原野谷川流域を中心に収集活動を始め、今では集めた石器や土器を展示公開するため、「仲屋考古資料館」まで建てられている。こうした収集品は、その地域の大昔の人々の暮らしを調べる絶好の資料となる。

仲屋氏の収集品の中でまず目につくのは、石のやじり（以下、石鏃と記す）である。いろいろな形のものがあるが、多くは二等辺三角形形をしており、短辺に当たる基部が挟りとられている例が多い。石鏃は、矢の先に固定して鳥や獣をとる狩りの道具で、縄文時代の遺跡から必ずといっていいほど見つかる、縄文人の基本的な道具の一つである。先述したように、旧石器時代から縄文時代への過渡期には槍が使われていたが、縄文時代には、弓矢が狩猟用具として登



上ノ段遺跡の石鏢（仲屋考古資料館蔵）

場した。槍は、手に持ったまま獲物に近づくか、なるべく獲物に近づいて投げつけるかするしかない。獲物に打ち込むことができれば、ほぼ確実にしとめることができるだろうが、気付かれて逃げられたり、投げた槍の命中率のことまで考えると、効率の悪い狩猟用具といえるだろう。

弓矢は、弾力性のある木を三日月状にたためて弦を張り、その弾力性を矢に伝えて、速く遠くへ飛ばす道具である。これはかなり発達した知恵の所産といえよう。先に述べた土器とともに二大発明とするゆえんである。弓矢の発明によって、シカ・イノシシ・カモシカのような中型獣の他に、ノウサギ・タヌキ・ニッポンザル・アナグマ・キテン・カワウソ・ニホンオオカミ（以上は浜松市蜷塚遺跡で確認された獣の種類）といった小型の獣もとりにやすくなった。それ以上に、弓矢によって、ツル・コガモ・ウミウ・シギ・サギ・キジ・ヤマドリ・トビ・ハヤブサ・ハト（以上も蜷塚遺跡発見の鳥類）のような鳥類が容易に手に入るようになったことであろう。槍と比べて弓矢の命中率は格段に高いのである。

縄文時代遺跡から採集される道具の第二は、石のおもり（以下、石鏢いすという）である。石鏢は、楕円形の偏平な小石の長径方向両端



上ノ段遺跡の石皿と叩石（仲屋考古資料館蔵）

を打ち欠いたり、刻みや溝を彫りつけたりして糸かけとした石器で、漁網のおもりと考えられている。投網に使えるような小型のものから、さし網や定置網に使われたような大型のものまで、さまざまな大きさのものが知られている。掛川市地域は海から遠いので、川魚を捕獲するのに漁網が使われたのであろう。川魚として網漁の対象になったのは、かなり大きな魚だったのでなかろうか。浜松市蛸塚遺跡は海に近いので、淡水魚としては、コ

イ・フナ・ギギしか知られていないが、川をのぼるスズキも加えていいだろうし、骨は残っていないが、サケやマスも網漁の対象となったであろう。アユやハヤのような小魚については、多分罾や釜が使われたと推定される。

縄文人の道具の第三は、石皿・叩石といった製粉用具である。石皿といっても、皿として使ったものではなく、石臼と呼ばれる方がいかもしれない。石皿の凹みに木の実を置いて叩石で磨りつぶしたと考えられている。前項で土器が主に木の実のアク抜きのために使われたという説を紹介したが、縄文土器は、縄文時代遺跡といえば、破片の形で必ずといっていいほど発見されるのである。古い時期の縄文土器は、単純な鉢形に作られていて、煮沸に便利であるが、やがて大型化したり、装飾

表1 ドングリとそのアク抜き方法

属		種	アク抜きの方法
コナラ属	コナラ亜属	クヌギ カシワ	製粉すれば水さらしのみ、粒のままなら加熱処理後水さらし
		ミズナラ コナラ	製粉すれば水さらしのみ、粒のままなら加熱処理後水さらし
	アカガシ亜属	アカガシ アラカン	カシ類 水さらしのみ
		イチイガシ	シイ類 アク抜き不要
シイノキ属		ツブラジイ ・スダジイ	
マテバシイ属		マテバシイ	

『縄文時代の経済基盤』渡辺誠他『考古学による日本歴史』2を参照した民俗学的分類

が加わったりする。巻頭口絵に、仲屋栄一が所蔵する、ほぼ完全な深鉢形土器の写真が載っている。口径が三五センチ、現存部分高さ二八センチ、元の高さ推定三七センチという大型のものである。その後縄文土器は小型化し、模様を施さない煮沸専用の鉢形土器と、模様を施して飾る深鉢形や土瓶のような注口土器という二系列に分かれて行く。

食料とされた木の実としては、表1のようなドングリ類の他、トチ・クリ・クルミ・カヤなどの堅果類が、各地の遺跡から見つかっている。県内では、沼津市元野遺跡から炭化したクリとミズギ、清水市天王山遺跡からクリとドングリ、静岡市蛭田遺跡からイチイガシが検出されている。掛川市の近くでは最近、森町坂田北遺跡で、ドングリ・クリ・クルミ・カヤなどの堅果類が発掘された。これは、掛川市地域に住んだ縄文人の食料を推定するうえで、大

いに参考となる。

こうした堅果類の中で、既に述べたようにアク抜きが必要なものは、ドングリ類では、クヌギ・ナラ・カシの類で、煮沸と水晒しによって食べられるようになる。イチイガシは、この表によるとアク抜き不用となっているが、静岡市蛭田遺跡では小川を堰止めて、アク抜き作業をしたとみられている。森町坂田北遺跡では直径三〇センチほどの穴にドングリがつまって発見されている。これは貯蔵穴というよりも、地下水を利用したアク抜き穴だったのかもしれない（次ページ写真参照）。

クリ・クルミ・カヤはアク抜きしなくても食べられるが、トチの堅果は煮沸や水晒しだけではとてもアクが抜けない。そこで、灰汁を混ぜて中和させる技術を、今日、民俗例で知ることができる。遠州地方では、水窪町で、現在でもトチの実を使った餅や煎餅が作られている。掛川市地域には、現在トチは自生していないが、栃原・栃沢のように栃にちなむ地名が残っている。かつて遠州平野にも栃は生えていたのであろう。

最近とみに注目を集めている青森県の三内丸山遺跡では、クリが栽培されていたという。発掘されたクリのDNA（デオキシリボ核酸）略で、遺伝子のことを調べたら栽培種に近く、遺跡近くの野生のクリとは全く違っていたというのである。森町坂田北遺跡でも栗の立木跡が数本分見つかリ、DNA分析で栽培種らしいというので、植林された栗林の跡ではないかとされている。

堅果は貯蔵することができる。先述した沼津市元野遺跡や清水市天王山遺跡で発見された堅果は、貯蔵穴とみられる穴の中に入っていた。佐賀県坂下遺跡では二一、山口県岩田遺跡では三三、岡山県南方前池遺跡や岡山太



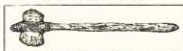
坂田北遺跡発見のドングリ貯蔵穴（森町教育委員会提供）

学構内ではそれぞれ一〇、ドングリ類のつまった貯蔵穴がまともって発見されている。東日本各地の縄文時代遺跡では、フラスコ状ビットと呼ばれる口より底の広い貯蔵穴の報告例が多い。食料を貯蔵できるということは、安定した食生活の保証である。縄文人の主な食料は、こうした堅果類であったと考えられる。青森県三内丸山遺跡のような大集落を支えたものは、クリを始めとする堅果類だったとされるのは、こうした情報によるものである。

堅果の他に食料となったと思われる植物はたくさんある。中でも辛類や球根類は重要な食料源だったと思われるが、それを証明する発掘所見はまだない。また、最近知られるようになった一年生の栽培植物については、次節で取り上げることにしよう。

縄文人の主な道具類の第四は、石おのである。石おのには打ち欠いただけのもの（以下打石斧^{うちいしきり}という）と磨いて仕上げたもの（以下磨石斧^{もろいしきり}という）とがある。打石斧は、主に土掘具として使ったと考えられる。柄の付け方としては、図1のように枝の股を利用して柄に直交するように固定する場合と、棒の先端に柄の方向に固定する場合とが想定できる。前者は鎌の形に似て、土を掘り返すのに便利である。後者は鋤に似て、垂直方向に穴を掘るのに適している。前者の使い方が主であれば、それは畑の耕作がかなり行われたことを主

図1 打石斧の復元図



上ノ段遺跡の打石斧
(仲屋考古資料館蔵)



上ノ段遺跡の磨石斧 (仲屋考古資料館蔵)

張することになり、縄文時代の栽培のあり方を考える材料となろう。この点については栽培植物の件とともに次節で再度取り上げることとする。鋤に似た掘棒の形のは、住居の柱を立てる穴を掘ったり、山芋を掘ったりする時に使われたことであらう。

磨石斧は、枝の股を利用した鎌の形の柄をつけて、おもに工具として使われたものと思われる。柄に対して石斧の刃を直交させると手斧（モノエ）のように削る工具となり、平行させれば、斧や鉞（ノミ）のような工具となる。家を建てたり、船を作ったり、弓を作ったり、木製の容器類を作ったりする時に、こうした工具は必需品である。今日まで、縄文人の作った木製品はほとんど残って

いないが、当時はたくさん作られたに違いない。

(2) 掛川縄文人の社会

ア 中原遺跡の住居跡



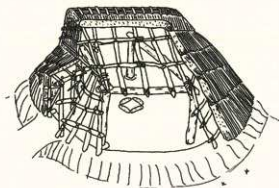
中原遺跡の竪穴住居跡

縄文時代の住居跡には、竪穴^{まきあな}、平地^{へいち}、敷石^{しきいし}の三種類が知られている。竪穴住居は、地面を掘り下げて床とし、周囲に掘り上げた土を積み、そのうえに屋根を架設した家で、縄文時代を通じて全国に見られる。平地住居は、地表をならして床とし、上屋^{うけや}を架設する家で、縄文時代の終わりがころ静岡県中部以西に見られる。

敷石住居は、地面を掘り下げた床の全面もしくは一部に、板状の石を敷き詰め、屋根を架設した家である。今から四〇〇〇年ほど前に限って作られ、北関東から岐阜県までの範囲で見つかっている。これまで市内で発見された縄文時代の住居は、すべて竪穴住居であり、平地住居と敷石住居は見つかっていない。

当時の住居の木造部分が、そのまま発見されることはまずない。遺跡では、もっぱら柱を埋め立てた穴や、火を焚いた跡（炉跡^{ろあと}）だけが発

図2 中原遺跡竪穴住居の復元図



見される。昭和五九年九月、吉岡地内に所在する吉岡大塚古墳の西側の茶畑で行った中原遺跡の第二次発掘調査で、今から五〇〇〇年ほど前の土器を出土する住居跡が発見された。住居跡は前ページの写真に示されるように、地面を掘り下げた竪穴住居で、平面形は不整形、東西四メートル一八センチ、南北三メートル八四センチの大きさであった。床面は硬く、叩きの土間のような感じであった。これは踏み固まったという感じで、建造当初に土

を突き固めたものではなかったと思われる。家の中央には石で囲んで作られた炉跡（石囲炉）があり、それを中心に屋根を支えた主な柱を立てた柱穴が四つ、そして南側には、柱穴よりも浅い穴が発見された。

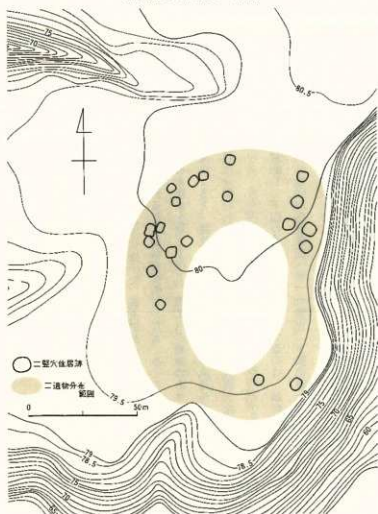
これらの状況を手がかりに、この竪穴住居を復元してみると、図2のようなになる。地上から梯子のようなものの中に降りると、家の中央には石で囲まれた炉があり、この炉が室内を薄明るく灯し、外よりもずっと暖かく、心地よいものとしていたと思われる。

ところで、この住居には何人の人が住んでいたのでしょうか。人数を確定する証拠はないが、発見した床面の広さから、柱などの太さや諸道具・食料を置く物置面積などを差し引いた居住空間を導き出すことによって、暮らしていた人の数を割り出してみよう。発見した住居跡の大きさから計算すると、その面積は約一二平方メートルである。

民俗学者によると、一人当たりに必要な居住面積は約三平方メートルといわれているので、その値で割ると四人になる。これに誤差一人を加えると、夫婦と子供二、三人あるいは、三世代の大人と子供というような家族が、この家に居住していたのではないかと考えられる。

市内に所在する縄文時代の遺跡は、全部で五〇数か所知られている。しかし、先に紹介した中原遺跡(吉岡)や源ヶ谷遺跡(地点)(秋葉路)、原遺跡(西郷)、向畑遺跡(八坂)などでは住居跡を発見しているものの、ムラの跡(集落跡)全体の姿は明らかにっていない。原田小学校校地を中心に広がる上ノ段遺跡や、その西側の段丘に立地する萩ノ段遺跡は大きな集落跡と思われるが、その状況についてはっきりとわかっていないのである。そこで掛川市に比較的近い調査例から、その様子を探ってみよう。袋井市長者平遺跡では、段丘上に一八軒分の住居跡、墓跡、石を集めた祭祀跡が、東に開く直径六〇メートルほどの半円形もしくは三日月状に並んでいたことがわかってゐる。特に住居跡は、二軒で一単位となり、これが三、四単位でひとつのムラを成していたと考えられている(吉岡伸夫「長手遺跡」、『縄文時代』一九八四)。また、図3に示す三方原台地の浜松市前平遺跡では、住居跡や大小さまざまな掘り込みが南北約一四〇メートル、東西約一〇〇メートルの楕円形の環状に展開する様子を確認している(太田好男「堀田地区縄文遺跡」、『縄文時代』一九八九)。島田市の神谷東遺跡の場合では、全部で六軒分の住居跡が見つかっただけであった。しかもうち二軒分が重なり合っており、三軒が近接していたので、三、四軒の家で構成されたムラであったと推定されている。これらの例から、多くても七、八軒、少ない例では三、四軒の家が、帯状若しくは環状に建ち並んでいたようである。そこで先の一軒の居住人数を掛け合わせると、ムラの人口は一〇数人、二〇数人程度であったと考えられ

図3 縄文時代の集落跡例（浜松市 前平Ⅱ遺跡）
（報告書を一部改変して転載）



る。そして、家の近くに死者を埋葬する墓があり、住居域と墓域が明確に区分されていなかったようである。

イ 人の交流と物資の交易

婚姻の形として、人類もごく古い段階では、群むれの中で不特定の男女の交わりが行われていたと考えられている。やがて、一組ずつの兄弟と姉妹が、それぞれ婚姻関係を結ぶようになり、しだいに一組の男女の婚姻関係が、固定化するようになったという。それに伴って、婚姻関係が一つの部族内部で完結する段階（族内婚）から、配偶者は必ず別の部族から選ばれる（族外婚）ようになった。縄文時代の社会では、一組の男女の婚姻関係がある期間永続し、配偶者は別の集落から選ばれる対偶婚が支配的だったと、多くの人は考えている。

春成秀爾は、縄文人骨によくみられる抜歯を取り上げて、縄文人の婚姻のあり方を次のように論じている。明治時代以降の長い人類学の研究成果によると、縄文人の間には広く抜歯の風習があった。健康な歯を抜き取る風習である。抜歯の仕方は、四八種程に分類されるが、基本型は、上下顎の犬歯を抜くかどうか、下顎の切歯（門歯）を抜くかどうかに絞られるという。そこで春成氏は、世界各地の抜歯の仕方やその意味と比較研究して、上顎犬歯を抜除するのは成人儀式に対応し、下顎の犬歯や切歯を抜除するのは、婚姻儀礼に対応すると考えた。下顎犬歯を抜くのは結婚後、自分の所属集団から他集団へ移った場合、下顎切歯を抜くのは結婚後も引き続き自分の集団に住み続けた場合を示しているというのである。遠州地方には、幸い貝塚があって、浜松市親塚と磐田市西貝塚の両遺跡から、わずかながら抜歯された人骨が発掘されている。その抜歯の型は、上顎の犬歯だけを抜いた男性（成人したが未婚）二例、上顎と下顎の犬歯を抜いた女性（他集団から嫁入りしてきた）三例と男性（他集団から

嫁入りしてきた。一例が確認され、別に不確実な例が二例ある。このことから、春成氏は遠州地方の縄文社会では、結婚後、夫方に居住する嫁入婚が支配的であったと結論している（『春成秀爾「縄文時代晩期の婚姻居住様式」』、『岡山大学法文学部学術紀要』四〇）。こうして、まず女性が他集団へ嫁入りする形で、人の交流が行われたことを知ることができる。

では、当時一つの集団が、どれほどの地理的空間を舞台に生活していたのであろうか。それを確かめることはかなり困難であるが、二つの方法論が知られている。一つは、人の手が入らない自然の状態を想定し、例えば一平方キロメートルの範囲内でとれる野生食品の総量を推定して、その野生食品による人口支持力を計算する方法である。小山修三は、岐阜県飛騨地方を例にして、一平方キロメートル当たりの人口密度を、最大で約五・七人と計算している。しかし、実人口としてはその半分程度とみなしているようである。縄文時代の集落にも規模の大小があり、青森

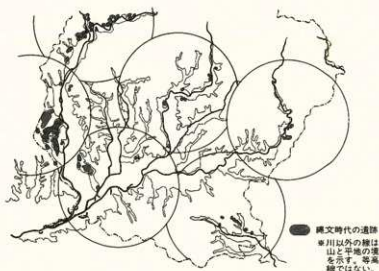


縄文遺跡の抜歯例（浜松市博物館提供）

県三内丸山遺跡では人口約五〇〇人と推定されているが、平均的な規模の集落は、二〇〇～二五人と考えられる。すると、その集落を支える地理的空間は、最低三・五～四・三平方キロメートル、その二倍強としても八～一〇平方キロメートルあれば足りる計算である（小山修三『縄文時代』一九八四）。

もう一つの方法は、同一河川流域に分布する遺跡の中から、地理的にまとまりがあり、かつ年代的に相互補充し合うような遺跡群を抽出する方法である。この方法の考え方は、

図4 掛川市地域における縄文人の日常生活空間想定図



長い年月を通じて、集落の位置は変わることがあっても、一つの集団はおおむね一つの地理的空間を生活の基盤にしていたと想定し、その空間内の遺跡は、一つの集団の長い年月の間に移動したムラの軌跡と考えるのである。向坂鋼二はそうした考え方で、遠州地方の山間部や平野部、更に大井川流域などの遺跡群を取り上げ、ほぼ半径三キロメートルの空間（必ずしも円になる必要はないが便宜的に円で示す）を、一つの集団の日常生活空間とした（『向坂鋼二、原始時代郷土考古学』）。この方法では、一つの空間は二八平方キロメートルとなつて、小山氏の計算を大きく上回ることになる。図4は、この方法を掛川市地域に適用したものである。これによると、原里地区、原谷・和田岡地区、岡津・曾我地区、西郷地区、東山口地区の五つの遺跡群と、菊川流域へ及ぶもう一つの遺跡群が想定できる。一つの集団を二〇～二五人とすれ



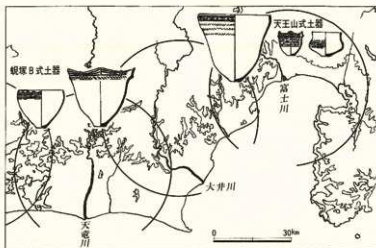
よく似た土器の比較（右 静岡県埋蔵文化財調査研究所蔵
左 河津町教育委員会提供）

ば、当時の人口は一二〇〇～一五〇人という計算になる。

未開社会では、一般に土器作りは女性の仕事とされており、縄文社会でもそうだったと考える人が多い。そのことを念頭に置いて、縄文土器の形や模様を観察してみると、かなり広い範囲によく似た土器が分布していることが分かる。一例を示せば、巻頭図版に載せた上ノ段遺跡の土器は、上の写真右に示した牛岡遺跡（八坂）の土器と共通性があり、同左の河津町段間遺跡の土器とよく似ている。こうした共通性は、婚姻による女性の移動の結果と考えることができるが、それだけでは理解しがたい。もっと広域にわたる人と人の交流、つまり情報交換の場があったのであろう。

このように縄文土器にみられる、形や模様などの共通性には、かなり広域にわたるものと、やや狭い範囲に限られるものがある。また、そうした違いは時期によっても変化していた。土器の形や模様などの共通性が認められる最小単位は、継続年数でおおよそ数十年程度、地域的な拡がりとしては、半径三〇キロメートルほどであった。半径三〇キロメートルといえば、図5に示したように、おおよそ遠州平野一帯をすっぽり覆う広さである。

図5 縄文土器による地域圏図



この範囲内には、先述したような日常生活空間が、少なくとも三〇ほどはあったであろう。これだけの広さと集団の間では、一人一人が、常に顔と顔を合わせるような付き合いはできない。にもかかわらず、同じ特徴の土器が作られていたのである。婚姻関係を含めて、かなりひんばんに集団同士の情報交換が行われていたとみななければならない。掛川市地域は、この領域の東端に位置しており、大井川流域の特徴も併せ持つ境界域に当たる。遠州平野の中心地とはやや性格を異にしていたといえるようである。

土器の形や模様などに認められる特徴のうち、かなり広域にわたるものについては、大きく中部山岳から伊豆半島にかけての地域のものに類似するものと、東海から西日本各地のものに類似するものとに分けられる。縄文時代中頃（約五〇〇〇年前）には前者がかなり優勢であったが、以後後者が主体を占めるようになるのである。こうした広域にわたる土器の共通性が何に基因するのか、まだ解明されつ

図6 縄文土器による広域地域圏図

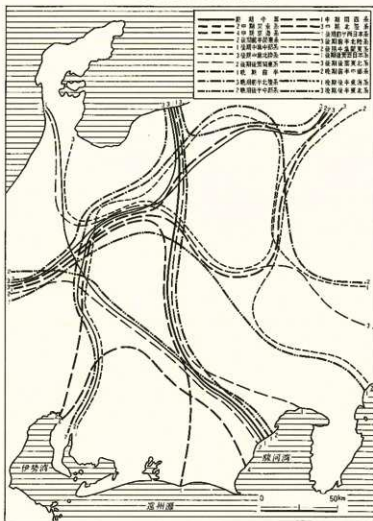
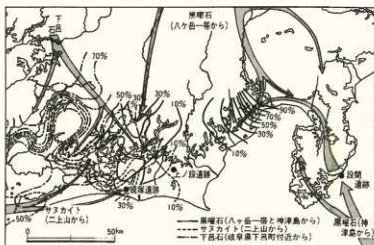


図7 静岡県下の黒曜石分布状況



くしてはいない。今は、掛川市地域がそうした広域の共通性をたどると、ほぼ大井川流域（海岸線では大崩海岸）を境に大きく東日本と西日本の特徴が入り替わる地域に接していることをよく示している点に注目しておきたい（図6）。

仲屋栄一が上ノ段遺跡で採集した五八一点の石鏃について、その石材を調べると、原野谷川が比較的近くで入手したと思われる頁岩が二八七点（四九・四セバ）、黒いガラスに似た黒曜石が一七一点（二九・四セバ）、サヌカイトが二七点（四・六セバ）、天竜川以西の山地で入手したと思われる珪岩が四九点（八・四セバ）、岐阜県下呂町付近で河原の転石として産出する下呂石が四七点（八・一セバ）、計五八一点となっている。県内で見つかる黒曜石の主な産地は、蛍光X線分析という方法で調べると、長野県八ヶ岳一帯（産出地点は数か所知られているが一括できる）と伊豆七島の一つ神津島である。仲屋栄一採集品はこの分析にかけてないが、これまで知られている所では、遠州平野の山寄りで

は神津島産が五割以上、海岸寄りでは八ヶ岳産が八割以上を占めている。神津島産黒曜石は、海上を伊豆半島東海岸へ運ばれた後、陸伝いに山寄りを西へ運ばれたらしい。そうまでして遠方へ運ばれたのは、緻密で弾力性があり、鋭い刃ができる性質が珍重されたためであろう（京都大学文学部史学研究所の東村（東村）研究資料による）。

サヌカイトは、奈良県と大阪府の境にある二上山で産出するものが、東へ運ばれたようである。運搬ルートは伊勢湾を舟で渡り、渥美半島を経由したり、浜松あたりまで舟で運ばれたりしたらしい。多くは天竜川以西で消費されたが、若干中・東遠の地域へも運ばれたのである。下呂石もすいぶん遠くから運ばれたものである。

石器の石材ではないが、頸飾として使われた玉類の中にヒスイ（硬玉）がある。巻頭口絵に出ている伊達方出土といわれる曲玉も、多分ヒスイである。ヒスイの産地は、北方約二五〇キロメートルの新潟県小瀧にある。これもまたすいぶん長旅をしたものである。

このように、縄文時代には婚姻に代表される人の交流や石材の動きにみられるような物資の交易が、かなり盛んであったことが知られるのである。そのことは、交流や交易に伴う情報交換を促すことになって、先にみたような広域の土器にみられる共通性を生み出したものと思われる。ここでは、婚姻と石材の動きを中心に述べたが、他にも例えば種族や部族連合のような集団組織の問題、山間部と海岸部との海産物をめぐる交易なども、重要な課題であるが、それを明らかにするための確かな情報はない。

ウ 縄文人の社会生活

縄文人は土偶を作った。どういう場面で土偶が使われたか、それを明らかにすることは困難であるが、土偶は



上ノ段遺跡の石棒（仲屋考古資料館蔵）

ほとんど女性を表現しているといわれている。乳房や臀部を大きく表現した例が目につく反面、男性を表現したと見られる例はないからである。掛川市地域では全形の分かる土偶は見つかっていない。仲屋栄一が収集した萩ノ段遺跡出土の腕と上ノ段遺跡出土の脚の破片がある。

女性が子供を生む能力は、縄文人にとって尊い力と映ったのであろう。野生動物も雌が子を産み、大地からはさまざまな生物が生まれ出る。そうしたさまざまな生命の源と女性とが重なり合って、大地を女性の力ミと観る原始的信仰が生まれるという。そうした信仰を地母神信仰と呼ぶ。

土偶はその地母神信仰の偶像、つまり女神像と考えられる。土偶はほとんど破片として見つかり、完全な例は少ない。

い。そこで、土偶を使うまつりの最終場面で、故意に割られたとされている。仲屋栄一が採集した土偶もそうした行為のあったことを示しているのであらうか。

土偶が女神像だからといって、その社会が母系社会であったと断定することはできない。前項でみたように、この遠州地方では、夫方居住婚（嫁入り婚）が支配的だったとすると、生まれてくる子供の帰属は、妻方居住婚



上ノ段遺跡の石剣（仲屋考古資料館蔵）

（鑲入り柄）の場合よりも父系になりやすいかもしれないからである。

石を太く棒状に加工し、時には頭部を丸くあるいは笠状に作り出したものを石棒^{イサヅ}という。石棒は男性性器に似ているというので、男性を象徴したものとする説が有力である。県東部では住居に組まれた石組の中に石棒が立てられていた例が報告されている。男性器崇拜ということであるが、石棒が多用されたのは、中部山岳地域を中心とする比較的限られた範囲であり、時期的にも中期（約五〇〇〇年前）にはほぼ限定されていた。掛川市地域でも、前ペー
ジの写真のように石棒が使われていた。

後期（約四〇〇〇年前）になると、石棒は姿を消して、石剣・石刀に代わる。石棒よりも精製されて、小型で細身に作り、身の部分は扁平に仕上げられている。両刃のものが石剣、片側にだけ刃をつけるものを石刀と呼ぶ。仲屋栄一所蔵の上ノ段遺跡の例は石剣で、握りの部分を細かく削って頭部を作
り出している。石剣・石刀は、青銅製武器の存在を見たり聞いたりして模作したものではないかという説まであるように、武器らしい形をしている。実用の武器とはいえないが、これを手にする男性は、いかにも強く勇ましく見えたに違いない。石棒に代わって男性の地位を象徴する持物になったと思われる。

仲屋栄一のもとには、固い石を半月形に整えて磨き、中央やや上に貫通孔穿った鐙形大珠と呼ばれる垂飾

品がある。長さ一〇・九センチ、原里上ノ段遺跡で採集されたものである（巻頭口絵）。これはかなりの珍品で、これを胸に下げた人物は、ムラ長のような地位にあったかもしれない。同じ巻頭口絵に載せるヒスイの曲玉も立派なものである。形は小さくとも貴重さには優劣をつけがたい。このように、縄文人の社会では盛期を過ぎることになると、男性がかなり社会をリードするような状況になったと思われるのである。

前項で述べたように、縄文人の間には技術の風習があり、成人に達した時や婚姻に際して、決められた歯を抜いた。成人や婚姻は、出生に続く人生の重要な節目であり、やがて一線を退いて長老の仲間に入り、最後に死を迎える。こうした人生の節目には、儀礼をとまなう。その儀礼を通過儀礼と呼び、古い時代ほど通過儀礼は大切に行われた。通過儀礼が整然と執行される社会は、年齢層に応じて社会参加の仕方や権利義務に違いがあり、幼児期に母親の保護を受けて育ってからは、親子関係よりも年齢層毎の横のつながりが重視されたという。そういう社会を年齢階梯制社会と呼ぶ。縄文社会は、そうした社会だったと推定される。

縄文人は亡くなると、等しく地面に掘り込まれた穴に埋葬された。特にていねいに扱われた者とか、豊富な副葬品を副えられた者はない。死に際しては皆平等であったといえる。掛川市地域では人骨の発見例はないが、浜松市蛸塚、磐田市西貝塚、袋井市大畑など貝塚をもつ遺跡では、長径約一〜二メートル、短径約一メートル前後の小判形の穴に手足を屈した姿勢で葬られていた。これを屈葬という。稀に手足を伸ばして埋葬された例もあり、それは伸展葬と呼ばれる。しかし、掛川市地域でこの時代の墓穴とみられる例はまだ検出されていない。

第二節 稲作文化の導入と掛川

(1) 水田稲作の掛川への導入

ア 原川遺跡と稲作の開始

縄文時代に原始的な農耕が行われたとする学説は、戦前にもあったが、昭和四〇年ごろから、八ヶ岳山麓の中期縄文文化の隆盛を支えたのは、原始的な陸耕であるとする組織的学説が、諏訪の藤森栄一を中心に唱えられ、その後継者も多い。栽培されたとされる穀物としては、ヒエ・アワのような雑穀類であったが、久しくそうした穀物の種子は発見されていなかった。ところが近年、次のような栽培植物が検出されたという報告が各地から寄せられている。福井県鳥浜貝塚の早く前期（約八〇〇〇〜六〇〇〇年前）の地層から、ヒョウタン・エゴマ・リョクトウ・シソが見つかった例を最古として、この四種に加えて、ヒエ・オオムギ・ソバ・アズマビシ・チャンチキ・モドヤ・オオアサなどの検出が、全国に及んでいる。これらの植物は、日本列島に自生していたものではなく、大陸のどこから海を渡って運ばれたものだという。これらを栽培して食料にしたとすれば、それは原始農耕と呼ぶべきものである。

中尾佐助は、アジア大陸から日本列島西南部一帯に及ぶ照葉樹林帯では、本来水晒し技術を持って堅果類やクズ・ワラビを食用化し、シソを栽培利用していたが、西方からシコクビエ・ヒエ・アワなどの雑穀類を栽培する

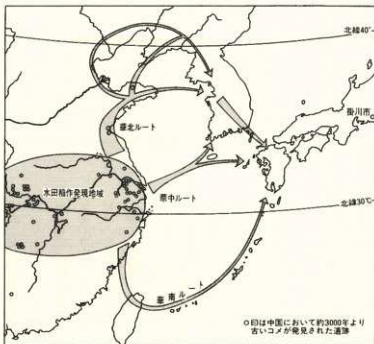
ようになり、やがて水稻栽培を行うようになったとする雄大な学説を展開した(中尾佐助「栽培植物と農耕の起源」(上山春平編『農業の文化』一九六七) 掛川市地域はいうまでもなく、その照葉樹林帯に含まれることは、第一章で明らかにされているとおりである。縄文文化は、狩猟採集民の文化としては、類のない高度な文化だといわれており、将来、ヒエ・アワのような雑穀栽培が、縄文文化を支えていたということが実証される日が来るかもしれない。

現在知られているこうした縄文時代の栽培植物の他に、イネの存在が報告されている。イネは、北緯三〇度以南の熱帯・亜熱帯に野生植物として存在するという。これが人の手で栽培化されたのは、揚子江の中流から下流にかけての地域であることが、最近しだいに明らかになりつつある。この地域では、およそ八〇〇〇〜七〇〇〇年前に、水稻栽培が始まったらしい。静岡県となじみの深い浙江省にも、河姆渡遺跡(約六五〇〇年前)という古い稲作遺跡が知られている。

日本への稲作渡来ルートについては、図8に示すように、大きく三つのルートが想定されているが、中でも揚子江中下流域で始まった水田稲作文化は、中国大陸の沿岸を北上して、山東半島から海を渡って朝鮮半島北部へ伝わったとする華北ルートを主張する人が多い。しかし、中国の考古学者の中には、更に北上して陸路を華北から朝鮮半島へ伝わったルートを主張する人もいる。北上するのには、気候への適応もあってかなり時間がかかったが、いったん朝鮮半島に渡って定着した稲作文化が、南下するのは早かったであろう。

日本列島では、長い間水田稲作は弥生時代に始まるとされてきた。弥生というのは、東京都文京区の東京大学構内に存在する弥生町貝塚の名に由来する。この貝塚で見つかった土器が弥生町式と呼ばれ、同種の土器がしだ

図8 稲作渡来ルート推定図



いに弥生土器といわれるようになり、時代の呼び名になったのである。弥生土器を使う文化が水田稲作を基盤にしていることが明らかになったのは、昭和八年（一九三三）のことである。ところが近年、北九州を中心とする西日本各地で、縄文時代後〜晩期（約三〇〇〇年前）の遺跡から、イネの存在を示す資料や水田跡あるいは木製農具などが見つかるようになった。イネの存在を示す資料というのは、イネの花粉・イネのプラントオパール・粃痕のついた土器・炭化したコメなどである。掛川市高田遺跡でも写真のように、炭化米が発見されている。プラントオパールは、細胞の形をした珪酸体のことで細胞化石ということもできる。イ



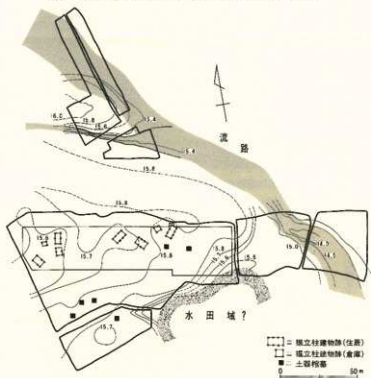
高田遺跡の炭化米

ネ科の植物は細胞の中に珪酸体を蓄積するが、それは壊れにくいので、粘土や土器の胎土中からも検出することができる。イネの存在を示す資料の他に、水田跡や農具も発見されたとなれば、それはもう立派な稲作農業の存在を疑うことはできない。そこで、縄文時代後期の一部から晩期は、弥生時代と呼ぶべきだとの意見もある。

掛川市地域に、稲作の情報が伝わったのは、遅くとも二五〇〇年前ごろのことである。六ノ坪遺跡（秋葉路）や原遺跡（上西郷）などから、粗い条痕だけで器面を仕上げた条痕文土器と呼ばれる土器を作った縄文人は、稲作のことを知っていたらしい。同じ特徴の土器は、愛知・静岡両県を中心にさらに北や東へも若干及んでいるが、この土器といっしょに西日本最古の弥生土器が時折見出される。掛川市地域にもあったに違いない。そうした土器の存在は、その弥生土器の由来、用途などをめぐって、稲作の情報が付随していたはずである。

掛川市地域で米作りが行われた最初の集落は、おそらく、原川遺跡であろう。原川遺跡は、原野谷川と逆川の合流点近くにある。このあたりは、標高一七メートルくらいであるが、ここに弥生時代集落が営まれたころの地表面は、地下一メートルほどのところに埋まっていた。集落の基盤となったのは、原野谷川が運んだ土砂が、周

図9 原川遺跡の集落構造図（発掘調査報告書から転載）



開より一段と小高く堆積している所で、自然堤防と呼ぶ地形である。この自然堤防は東西に延びていて、その東端の北側に住居、南側に墓地在営まれていた。住居は、柱を三〜四本ずつ二列に埋め立てて、屋根を架け壁をめぐらす作りで、掘立柱建物と呼ぶ。別に四本柱の建物跡もあり、これは高床式の倉庫だったかもしれない。発掘調査した範囲内では、掘立柱の住居跡が三棟と高床式倉庫跡が一棟を単位とする集落構造だったらしい。墓地は、弥生土器に遺体を収めて穴に埋めたもので、土器棺墓という。六基発見され、その

集落だったと推定される（静岡県埋蔵文化財調査研究所）。

イ 安齋寺遺跡の集落構造

図12をみると、一八〇〇年ほど前の弥生時代後期になると、遺跡（集落跡）の数が急増していることがわかる。

この傾向は、静岡県内全般の状況とも一致している。ところが、集落立地の面からみると、中期に平野部に形成



原川遺跡の建物跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所提供）



原川遺跡の土器棺墓（静岡県埋蔵文化財調査研究所提供）

うちの一基では土器棺の中から、幼児とみられる脂肪酸とコレステロールが検出されたという。こうした土器棺がすべて幼児用だったとすると、成人の墓は別に作られたことになるが、これ以上のことはわからない。水田の跡は見つかっていないが、水田はおそらく集落の南側に展開していたものと思われる。紀元前二世紀（約二二〇〇年前）ごろの

された集落が、後期には縄文時代のように台地や丘陵上に営まれる例が多くみられる。これは、この時期の掛川市地域の集落の特徴で、次項においてその意味を考えるとしよう。

昭和六三年度に東部工業団地（エコポリス）造成に先立ち、掛川市教育委員会が調査した安養寺遺跡（安養寺）は、そうした集落立地を示す遺跡の代表例の一つである。安養寺遺跡は、西山口地区の宮脇、園ヶ谷の北側、山間にある安養寺地内に所在した遺跡で、標高七〇メートル前後の南向きの段状に平坦面を持つ地形に立地していた。近くの低地との比高差は、およそ二〇メートルである。調査では、平安時代末（一二世紀前半）の陶器出土する建物群が重複して発見されたが、当初は弥生時代後期（三世紀）から古墳時代前期（四世紀）にわたり営まれた大規模な集落遺跡であることがわかった。

発見された建物跡は、竪穴住居跡が七五軒分、掘立柱建物跡が三棟分である（図10）。掘立柱建物跡は高床倉庫だったと思われる。これらの建物跡は、一時期に何軒の組み合わせて存在したのであろうか。その様子を、出土遺物の時期を細分したり、住居跡の重なり具合を調べたりして検討を加えると、三〜四時期にわたって営まれたものであることが予想される。また、発見した住居跡の配置状況をみると、中央の谷部を挟んで東側に三グループ、西側に二グループあることがみてとれる。その中で、倉庫跡を含むのは、西側の上の段丘部分だけである。こうした状況を踏まえると、一時期には一〇数軒〜二〇軒ほどの竪穴住居が集落を構成していたことになり、数少ない倉庫は集落全体で管理するものであったようだ。

平成二年五月〜一〇月にかけて、日坂バイパス建設工事に先立つ向畑遺跡（八坂）の発掘調査が行われた。向畑

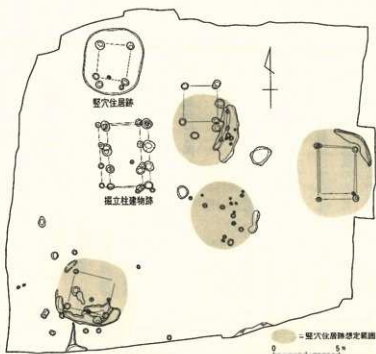
図10 安養寺遺跡の全体図



遺跡は、逆川上流左岸の標高九〇～一〇〇メートルの山稜上に立地する集落遺跡で、近くの低地との比高差は五〇メートル前後を測る。調査では、次ページの写真にみるように、弥生時代後期後葉（三世紀）の竪穴住居跡一一軒分と掘立柱建物跡一棟分を発見した。これらの建物跡から出土した土器を詳細に検討してみると、集落は、一時期に竪穴住居四軒と高床倉庫一棟が組み合わさって、二～三時期にわたって営まれていたことが分かった。

向畑遺跡の眼下を流れる逆川を下り、現在の市役所（長谷）から三〇〇メートルほど西に行った、丘陵の平坦部から、向畑遺跡と同時期の小さな集落跡が発見された。長谷土地区画整理事業に伴う東ノ谷遺跡の発掘調査

図11 東ノ谷遺跡の遺構全体図



で、竪穴住居跡五軒分と掘立柱建物跡三棟分（内二棟重複）が発見されたのである（図11）。内五つの建物跡が焼失しており、そのため当時の集落状況がそ



向畑遺跡の全景（静岡県埋蔵文化財調査研究所提供）

のまま生き埋めにされてしまったようであった。出土した土器から、これらの建物は弥生時代後期のおおむね二時期にわたり営まれたもので、建物群は、住居四軒に対し倉庫が一棟という組み合わせによって集落を構成していたとみられる。

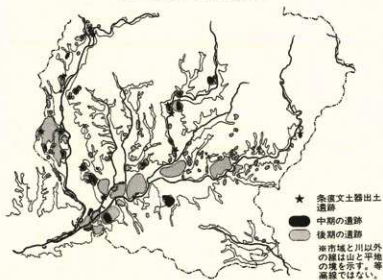
こうした調査成果から、三・四世紀の弥生時代後期・古墳時代初頭になると、集落は低地の平野部よりも高台に多く作られたことが分かった。また、弥生時代には必ず高床式倉庫が作られ、それは三・四軒の単位で一棟を所有する小集落がある一方で、安養寺遺跡のように集落単位で二、三棟の高床式倉庫を管理・所有する集落が存在することも分かった。

(2) 弥生集落の展開と地域性

ア 弥生集落の展開

曾我領家遺跡を掛川市教育委員会で調査したところによると、地下一・四メートルほどの所に中期後半（二世紀ごろ）の生活面があり、その後約〇・七メートルの厚さの土層に覆われて、〇・七メートルの深さに弥生・古墳時代の生活面が認められた。つまり、弥生時代中期以後、領家遺跡は土砂の堆積が著しかったらしい。他方、和田岡や岡津の台地上や各河川流域の丘陵地帯では、後期の集落が急増した。和田岡や岡津の台地には、広範囲に遺跡が拡がっている。規模の大きな集落かと思われる例もあるが、他の丘陵地帯の遺跡は、一般に小規模である。図12には、現状で知られる市内の弥生時代遺跡の分布状況が示されている。逆川流域では平地にも遺跡

図12 市内弥生時代遺跡分布図



が知られているが、実態はほとんど分かっていない。これに反して原野谷川流域の平地には、ほとんど遺跡がない。河川の堆積が早く、土砂の下に埋没しているか、洪水被害が多く、それを避けて台地や丘に集落を構えたかのいずれかであろう。多分後者であったと思われる。逆川流域では、河川が平地のさらに低い所を流れているので、平地に住むことが可能だったのかもしれない。それにしても、台地や丘陵に遺跡が多いのは、掛川から袋井にかけての特徴である。

丘陵上の小規模な集落は、前項の東の谷遺跡を例にすることができる。台地上の大規模集落とみられる例は、和田岡にみられるが、集落全域が調査されたわけではないので、詳細はわからない。秋葉路の六ノ坪遺跡では、東西五〇〇メートル、南北二五〇メートルの平坦な丘のうえに、七〇基以上の竪穴住居跡が展開していた。その配置状況は、満遍なくというのではな



台地に営まれた六ノ坪遺跡の住居跡群

く、粗密の差があり、密な部分には掘立柱の高床倉庫跡らしい建物が付随することがある。そうした状況をみると、この遺跡は向畑遺跡や東の谷遺跡のような集落が、いくつか集まってできた集落だったように思われる。和田岡の台地上の集落も、似た構造だったのではなからうか。

年代的にみると、逆川と倉真川の合流点より西の平地に営まれた遺跡は、弥生時代と共に姿を消す例が多い。これに反し、合流点以東と原野谷川流域では、弥生時代から引き続き次の古墳時代前期（四世紀）に続く遺跡が主流を占める。この点は、遠州平野の中央部と大きく相違している。平地の集落がなくなって、台地や丘の上に集落が集まるというのは、かなり異常な事態が生じたように思われる。

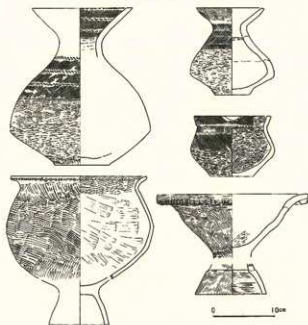
こうした事態の解釈は容易ではないが、一つは自然環境に原因を求めることができるとであろう。弥生時代中期（前二〜後一世紀）は、縄文時代の終わりがら続く冷温期で、海面低下があったといわれている。隣の菊川町白岩遺跡でも中期の生活面は、地表下約一・五〜三メートルと報告されているが、先述した領家が地表下一・四メートルに中期の生活面が認められているのと共通している。海面が低下すると浸食が進み、上流へ向かうほど河川の下刻が進むはずだからである。ところが、後期（二〜三世紀）

には、小海進があったとされ、堆積が進むことになる。それに加えて、太田川流域の河川堆積が先に進行し、袋井市愛野辺から東の原野谷川流域には、湿地ができたり、長期にわたり滞水が生じたりしたに違いない。傾家遺跡が中期以後厚い粘土に覆われたのは、そのためではなからうか。しかし、こうした自然環境の変化だけで説明しきれぬわけではない。もう一つの要因として、台地や丘の上に集落を移さざるを得ない事態が生じた想定することはできないであらうか。集落が低地から丘の上に移動する要因としては、まず、畑作のように水が乏しくても行うことのできる農業を行う場合が考えられる。しかし、台地ならともかく狭い丘陵尾根は、畑作にも適していないように思われる。次に考えられるのは、農業としては依然として低地の水田経営に主体を置きつつも、社会不安が生じて、相互に連絡がとりやすく、平地の人の動きを観察しやすいような、丘の上に居を移したという想定である。この解釈でも説明しきれない部分が残る。いまは、自然と社会の双方の要因がからみ合った結果と理解しておこう。

イ 壺・甕・高坏

縄文土器は、形状から大きく深鉢と浅鉢の二種類に分けられる。縄文時代を通じて使用されたのは深鉢で、その機能はもっぱら煮沸用であった。炉の中に立て周囲からの炎の熱を受けやすいような形を呈している。芋や魚貝類等を煮て食べたのであらうが、土器がもっともよく利用されたのは、前節②で述べたように、トチの実やドングリのアタ抜き作業だったとされている。浅鉢は、深鉢で煮た食品や汁、あるいは果実酒などを盛り付けるための飲食器で、縄文時代前期から使われた。

図13 壺・甕・高坏実測図



こうした深鉢・浅鉢の土器の口縁部などに粘土を貼り付け、立体的な装飾を施したものも作られるようになるが、これは、祭祀などの非日常的な場合に使用されたものだと考えられている。

弥生時代になると、稲作の導入によって食生活に変化が生じるとともに、器の使い方が多様化し、用途に応じて便利な形態が考案された。土器については、図13のような壺・甕・高坏という三種類の基本形態が作られた。壺は、縄文時代にはほとんど見られなかった形態である。その用途は貯蔵用である。いったい何を貯蔵していたかということであるが、壺の形状から推察してみると、口径が狭く、頸部が長いものは、飲料水や酒などの液体、口径が広いものは、木の実などの食材などであったと思われる。当然、米も大切に壺に保管されていたことは容易に想像できる。



高田遺跡における弥生土器の出土状態

甕は、米を調理するための器である。既に述べたように、縄文土器では深鉢が調理機能を果たしていたが、弥生土器の甕も中期（一世紀）までは鉢形をしており、両者の形状は極めて似ている。しかし、後期（二世紀）になると、甕の底に台を付けた台付甕が伊勢湾から東の太平洋沿岸地域に現れる。もちろん、市内の当該時期の甕も台付甕である。これは、熱効率を上げるための工夫であろうが、近畿地方以西の地域では台付甕は見られない。そこで、このような形態上の違いは、米の調理法の違いととらえることができるのではないだろうか。

高坏は、浅鉢に細長い脚をつけたもので、食物を盛り付けるための器である。その中にはカミへの捧げ物を盛る祭祀用としての用途も含まれて考えられている。縄文時代には浅鉢が同じ機能を果たしていた。

これらのことから、壺・甕・高坏の機能をそれぞれ、貯蔵形態、煮沸形態、供膳形態と呼んでいる。その機能は貯蔵形態を除いて、縄文土器から引き継いだものであるが、それぞれの機能をより一層高めるための工夫が見られるのである。なお、弥生土器には、この三形態の他に鉢や片口などもあるが、その数は少ない。

壺・甕・高坏・鉢・片口といった各形態の組み合わせやその比率が、年代や地域によって異なることも知られている。土器は当時の

人々の生活必需品であったから、そうした違いは、文化の違いを示していると考えられる。

そこで、この壺・甕・高杯という三つの器種が、掛川市域ではどんな比率を示すか分析をしてみよう。ここでは、平成八年度に発掘調査を実施した女高Ⅰ遺跡の溝状遺構から出土した土器と昭和六二年度調査の高田遺跡の第四号住居跡から出土した土器を資料に用いた。器種構成比率を分析するには、原形を復元できたものは一個体とし、壺の破片は底部で数えることとして、半分以上残るものは一個体、半分以上は〇・五個体として数え、甕と高杯の破片は、台や脚の接合部の数で総量を算出した。それをまとめたのが、表2である。

これを周辺の主な遺跡から出土した弥生土器と比較したのが表3である。周辺の遺跡では溝状遺構から出土のものが多く、女高Ⅰ遺跡の数値と比べると、壺が占める割合は、他の遺跡とあまり差が見られない。しかし、女高Ⅰ遺跡では、甕よりも高杯の数値が高い点が注目される。表3の他の遺跡では、甕が三〇パーセント前後、高杯が一〇〜二〇パーセントで、高杯は、壺や甕に比べると少ないのが一般的である。女高Ⅰ遺跡の例は、たまたま高杯が多く使われた地点の資料だったのかもしれない。

ところで、静岡市の登呂遺跡では、土器の高杯は出土していない。登呂遺跡に限らず、静岡平野の弥生時代の遺跡からは、土器の高杯がほとんど出土しない。ところが木製の大型高杯は出土している。土器の高杯が壊れやすく長持ちしなかったため、代わりに木製高杯を作ったのであろうか。それにしても木製高杯の数も少ない。静岡平野では、高杯を食器として使う文化が育っていなかったと考えるしかない。木製高杯は、浜松市伊場遺跡の大型高杯と同じように、カミに捧げ物をするような祭祀の場面で使われたのではないだろうか。このように、器

表2 掛川市内後期弥生土器の器種構成

遺跡名	女 高 1		高 田	
出土位置	SD02		SB04	
器種	点数	構成比率	点数	構成比率
壺	66	56.4	3	37.5
甕	14	11.9	4	50.0
高杯	36	30.8	0	0
鉢	1	0.9	1	12.5
計	117	100.0	8	100.0
時期	菊川式古段階		菊川式新段階	

表3 中・東遠地域の弥生土器の器種構成（中嶋郁夫による）（%）

行政区	袋 井			磐 田		菊 川
遺 跡 名	鷗 松	玉 越	土 橋	二之宮 貝 塚	御殿・二 之宮	耳 川
出土位置	SD07	SD14	遺構出土 総 数	不 詳	TD7、10 合 流 点	旧流路
壺	57.5	66.7	54	43	51	43.4
甕	32.4	21.6	32	28	34	37.5
高杯	10.1	11.7	14	29	15	19.1
時 期 (菊川式)	古様相及 び中様相	新様相	新様相※ 一部中様 相を含む	古様相	中様相と 新様相の 混在	中様相と新 様相に古様 相が混在

種構成の比率の違いは、地域や文化の違いを反映していることがあるのである。地域性とも言うべき特徴は、器種構成比率だけでなく、土器の形状や施される模様によっても見いだすことができる。考古学では、むしろこの方法によって地域性を考えることが多い。次に模様による地域性についてみてみよう。

前段において、掛川市内とその周辺の主な遺跡の器種構成比率を比較したが、これに用いた資料、つまり、中東遠地域で使われていた弥生時代後期（二・三世紀）の土器を「菊川式土器」と呼んでいる。昭和二十四年（一九四九）に、菊川町白岩遺跡が発掘調査された当時「白岩上層古式」と呼ばれていた土器が、その後同じ特徴の土器は、菊川流域を中心に分布することが明らかになったとして、「菊川式」と命名されたのである。その特徴とは、まず、壺は、いちじくの実のような下膨れの形をしており、肩の部分に縄文が施されたり、先端が三本以上に分かれた櫛状施紋具をジグザグに突き刺した「櫛刺突羽状文」と呼ばれる模様が施されている。櫛状の施紋具を用いた櫛描文は、西日本を中心に拡がりをみせるのに対して、縄文は、縄文土器に引き続いて用いられた模様で、東日本の弥生土器に顕著である。菊川式土器は、両者の施紋方法が混在した土器であり、東西文化の接点ともいうべき地域が、この中東遠地域であることをよく示している。壺は、全面に刷毛のようなもので仕上げた痕を残すだけで、模様らしいものはない。口元にヘラのような工具で刻んだ「キザミ目」が施されるだけである。外面に煤の付着が目立ち、内部に「おこげ」の痕を残すものもある。煮沸の機能のみを優先させた容器であることが分かる。

高坏は、食物を盛る坏の部分が、例えていうなら麦わら帽子をひっくり返したような形をしている。罎が大きい

く張り出し、その端面に甕と同じようなキザミ目が施される。また、坏の底部と脚との接合部分に、壺と同様の櫛刺突羽状文が施されるものもある。更に、脚の裾が、折り曲げられているのも特徴である。

以上のような検討を経て「菊川式土器」は、形や模様、更に器種構成比率において、隣接する天竜川以西の西遠地域とも、また、大井川以東の駿河地方とも、かなり顕著な相違をみせていることが分かり、それは食生活という重要な文化面での違いを反映していると考えられるのである。

こうした顕著な地域差が、古墳時代（四世紀）になると、とたんに解消して土器の地域性が見られなくなってしまう。これは、大和政権の政治的な影響力がこの地域にも及んでくる過程で、地方の生活に中央の規制が加えられたからだと考えられている。それは食生活にも影響を与え、弥生土器の系譜を受け継ぐ土師器の製作にも、画一的な規制が働いたことを示している。しかし、四世紀の土器の中には、大和地方との関係だけでは理解できない要素も見られる。それは、薄く黒ずんだ色に焼き上げられた台付の甕で、口元を二段に作っている。その断面がSの字のようになるので、「断面S字状口縁甕形土器」、それが略されて「S字甕」と呼ばれている。さらに、粘土の中に雲母をたくさん含む点も特徴の一つである。この甕は、伊勢湾沿岸で発明され、各地へ拡散したが、特に東海道沿いに、東へ波及したものが多かった。掛川市内でもこの「S字甕」が見つかっている。このことから、大和政権の東方進出には、尾張の勢力が大きくかわっていたことが推定されるのである。

第三節 掛川における政治社会への動き

(1) 銅鐸のまつり

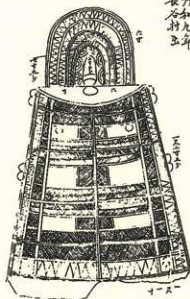
ア 長谷の銅鐸

掛川藩主太田資始時代の天保年間に完了したという『掛川誌稿』に、左に掲載するような記事がある。今のこ
とばに直すと「明和九年（一七七二）五月二十一日（これは旧暦）、庄屋甚左衛門の下男で清五郎という者が、
秣を刈ろうとして小出ヶ谷という所へ行き、山際が崩れている場所から、銅鐸一口を手に入れた。今仁藤村（現在
の掛川市仁藤）の正願寺にあるものがそれである。銅鐸の高さは二尺餘（六〇センチ強）、鈕（釣手の部分）の高さ五
寸九分（一七・九センチ）、身の高さ一尺四寸五分（四三・九センチ）、口の直径は縦六寸二分（縦の厚み一八・八
センチ）、横八寸八分（縦幅、二六・七センチ）で、左右に耳のようなもの（鐸の飾耳）があつて、鈕から口（裾）ま
でひとつづきに
云所の山際崩れし處に至りて、銅鐸一口を得たり、今仁藤村正願寺に在るものはなり、鐸高二
尺餘（高二尺四寸五分）、口徑縦六寸二分、横八寸八分、左右に耳の如きものあり、鈕より口につ
けり、鈕の前後に二孔あり、此孔は舌の葉を貫くためなり、肩の表背に四孔あり、此孔は發音の
ためなり、各徑六七分なるべし、敷紋なく羅紋あり、高サ十斤十兩、土色透徹して、其聲餘韻なし、

「掛川誌稿」
（静岡郷土研究会）

でひとつづきに
なっている。鈕
の前後に二つの
孔がある。この
孔は舌（銅鐸を

図14 長谷出土銅鐺図「銅鐺の研究」



月和九年
長谷村五

鳴らす振子^{つな}の索^{つな}を通すためとみられる。肩の辺の表と背に四つの孔がある。この孔は音を出すためのものだろう。孔の直径は六分か七分（約二センチ）だろう。署名や印はなく、羅紋（網目のような斜格子文）がある。重さは一〇斤一〇兩（約六・五グラム）ある。土の色が滲み込んでいて、音には餘韻がない」というのである。この銅鐺は現在正願寺にはなく、所在不明となっているが、江戸神田の屋代弘賢という人が著した『古今要覧稿』に、この銅鐺の詳しい図が載っている。図14がその写しである。

この図から銅鐺の特徴をうかがうと、①三条の線で縁取りされていて、②身の両脇に二個一對の単純な飾耳が上下それぞれ三つずつ（下辺のものが欠けている）ついている。③鈕の内側にある鈕孔の縁には、重弧文と呼ぶ同心円に似た模様がつく。④身には上下四段、左右三帯の模様帯によって、六つの区画が設けられ、中の二段が綾杉文^{しんぎょうし}といって交互に方向を変える斜線帯になっている。他は斜格子文^{しんぎょうし}とか袈裟^{けさ}帯文とかいわれる斜めの網目になる。これを『掛川誌稿』では羅紋と呼んだのである。⑤上下四段の模様帯の中軸を貫く三条の線（これを軸突線という）が、縁の飾の部分まで及んでいる。そしてもう一つ、⑥身の上辺にある二つの孔は、円形をしている。この孔は、銅鐺を鑄造する時、外型二つを合わせた間に差し込

む中^{なか}型を、浮かせるために置いた型持の痕である。

長谷の銅鐸にみられる、これらの特徴は、三河地方から遠江地方にかけて集中的に見つかっている銅鐸の特徴に一致している。そして、この銅鐸は、銅鐸分布圏の東限を画す重要な位置を占めている(図15参照)。これを掛川市に一番近い磐田郡豊岡村敷地の銅鐸と比較しておこう。⑥の型持の円孔が、敷地の銅鐸では方形になっている点が違うが、互によく似ていることが分かる。また、敷地の銅鐸では、⑦鈕から鰭、更に下辺を飾る鋸歯文の中には細い平行線が充填されているが、その方向が隣同士で向きを変えている。この点については、長谷銅鐸図には表現されていない。こうした特徴をもつ銅鐸は、三遠式と呼ばれ、同時期に作られた近畿式銅鐸と対比されるのである。近畿式銅鐸では、②に当たる飾耳が重弧文になり、③に当たる部分の模様が鋸歯文になる例が多く、④と⑤に当たる身の装飾は、斜格子文のみとなり、⑤の軸突線はほとんどみられない。⑥の型持孔は方形になり、⑦の縁や下辺を飾る鋸歯文の中の細線は、交互に変わるだけでなく平行している。そして、何より特徴的なのは、鈕に一对の渦卷文を施した大きな飾耳(双頭渦文飾耳と呼ぶ)を三つ付けている点である。近畿式銅鐸は、滋



磐田郡豊岡村敷地出土装飾文銅鐸
(東京国立博物館提供)

く、④と⑤に当たる身の装飾は、斜格子文のみとなり、⑤の軸突線はほとんどみられない。⑥の型持孔は方形になり、⑦の縁や下辺を飾る鋸歯文の中の細線は、交互に変わるだけでなく平行している。そして、何より特徴的なのは、鈕に一对の渦卷文を施した大きな飾耳(双頭渦文飾耳と呼ぶ)を三つ付けている点である。近畿式銅鐸は、滋

図15 新しい銅鐸の分布状況



「銅鐸の時代」春成秀爾『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集（図9を基に作成）

賀県から徳島県に及ぶ近畿地方に多くみられるが、東海地方にも若干分布が知られ、なかでも渥美半島から浜名湖沿岸にかけてよく見られる（図15）。

銅鐸は、水田稲作を基盤とする弥生文化の所産であり、人里離れた場所に埋められていたことを思えば、農作業の節目のどこかで行われる、農耕儀礼に使われたであろうことは察せられる。しかし、その具体的な儀礼については諸説あって決着がつかない。

銅鐸には年代差や大小差があり、おおむね小型のものから大型へと変化したようである。小型、中型の銅鐸の内側には磨滅の痕跡が認められ、内部に吊るされたとみられる舌が見つかっていたり、舌を吊る輪を作り出した例さえある。鈴のように振って鳴らしたことは間違いない。これに対して、近畿式や三連式の銅鐸は、大型化したもので製作時期も新し

いとされているが、これらの銅鐸には、鳴らした痕跡がない。つまり、同じく銅鐸でありながら、鳴らして使う段階から、鳴らさずに据えて拝むような段階へ移行したようである。

遠江の銅鐸は、水源に近い谷川を少し見下ろすような谷の奥か、平野の川の縁のような所から発見されている。銅鐸出土地に立つと、当時の集落跡は見えない。集落跡から、近畿式銅鐸の破片が見つかった例はあるが、完全な銅鐸はまだ出ていない。銅鐸は、当時の人々にとっては、水田稲作になくてはならない水の精、あるいは水のカミがすむ聖地に埋納されたのではないだろうか。しかし、春成秀爾は、銅鐸は本来穀倉にあって稻魂を結びとめ、その成長を守護していたが、それをおびやかすような豪雨・旱魃・虫害のような非常事態が生じた時、それを招いた邪霊の侵入路を断つように銅鐸を埋納して防いだと考えた（春成秀爾「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第5集）。

銅鐸については、他にもさまざまな説があるが、銅鐸は集落や共同体のものであって、個人の所有物ではなかったと考えている点では、おおむね意見が一致している。最近、浜松市や細江町で、埋納当時のままの姿で銅鐸の発見が相次いだ。それは、銅鐸の體を上下にして横にねかせるといふもので、従来、発見当時の聞き取りや埋納痕跡によって知られていた事実を裏付けるものであった。そのことは、とりも直さず、銅鐸埋納に際して一定の方式があったことを示すものである。その埋納儀式が、ムラ人全員立ち会いの下で行われたのか、限られた人物によってひめやかに行われたのか、それはもう想像のかなたである。それにしても、銅鐸のまつりを持つ地域と持たない地域の差は大きかったと思われる。その意味で、掛川市地域は銅鐸のまつりを行う地域の東限であったことを、長谷の銅鐸が教えてくれている点は重要である。

稲作農耕の社会では、一年を単位とする生活様式が確立し、秋収穫される初穂をカミに捧げた後みんなで食べ合って、新しく生まれ替わった気分になったと考えられる。新嘗祭にいしきまつりの原形を想定してみたのである。銅鐸はそんな場面で使われたかもしれない。まつりを司るのは、ムラの長であつたか、巫女まじなのような女性だったか分からないが、やがてまつりの主導権は、ムラ長の手に移るようになり、初穂はムラ長から分与されるような形になっただろう。そうなればムラ長は、首長といってもいい。かれは、近畿地方でいち早く大きな勢力を持って、カミとあがめられるようになった人物から、円くて光る銅鏡の配布を受けるようになったものと思われる。近畿地方の大きな勢力者は、全国を自分を中心にとめたいと考えていたであらうし、地方の首長たちも、自分の地位を高め、地域の人々からカミと尊ばれるために、近畿地方の勢力と手を結んで、鏡の威力にすがったかもしれない。

そうなると、銅鐸はもう不要となってしまう。首長たち自身が銅鐸よりもっと権威のあるカミと同一視されるようになったからである。

しかし、地方の首長の中には、そうした動きに背を向ける者もいたに違いない。そこには社会不安が生ずる。

イ 剣 と 槍

渚水大六山遺跡の墓穴とみられる掘り込みから、石を磨いて作った剣と槍が見つかっている。また、次項で詳しく述べることになるが、下西郷原新田遺跡の溝で四角に囲んだ墓の中央から、死者に副えられた鉄製



大六山遺跡の石剣(右)と石槍

の剣が発掘されている。西日本では珍しい発見とはいえないだろうが、静岡県内では他に例がない。墓の主は戦士だったかもしれない。

遠州平野の中央部には、浜松市梶子遺跡・山ノ神遺跡、浜北市芝本遺跡、磐田市御殿二之宮遺跡、袋井市鶴松・土橋遺跡など、面積にして一〇ヘクタールを超すほどの大規模な遺跡がある。そうした遺跡では、多くの場合、幅

や深さのある堀のような溝が見つかっている。集落のまわりに堀をめぐるしていたらしい。こうした集落を環濠集落と呼んでいる。もっと小さい遺跡でも環濠をめぐる例がある。原新田遺跡でも、幅二・〇メートルの堀が三七メートルほど確認されており、環濠集落だったと推定される。こうした環濠は、外敵からムラを守るためのものであったと考えられる。

水田稲作農業が根を下ろしたところは、水田にしやすく、稲の生育に一番適した場所だったに違いない。弥生時代中期（紀元前二世紀～後一世紀）に成立した、梶子・芝本・鶴松といった大きな遺跡は、そうした有利な条件を備えていたのであろう。後期（二～三世紀）になると、当時の技術で水田化が可能なところは、おおむね水田として利用されたであろうが、開田が遅れた場所ほど不利な条件が重なり、単位面積当たりの収穫高は低かったに違いない。このように、まず、水田自体に生産力の差ができていたとみられる。次に、集落の人口、指導者の資質、立地条件等についても差があったと思われる。



原新田遺跡の鉄剣

こうして、水田稲作農業が定着してしだいに発展してくると、集落と集落の間にさまざまな格差が生まれ、集落の中でも富を蓄えた所帯と、そうでない所帯が生ずる結果となる。こうした、不均等な発展に武力が加わると、それは社会不安につながり、人が人を支配しようとする権力が芽生え始める。本項の冒頭で取り上げた剣と槍は、掛川市地域の弥生時代の終わりごろが、そうした社会不安がつのりつつあった段階を暗示しているように思われる。そうした見方をすれば安養寺遺跡で見つかった数点の磨製石鎌（石を磨いて作ったやじり）も、武器だった可能性がある。

もし、外敵に立ち向かうとすれば、大勢の人間が集まっている方が有利であろう。にもかかわらず、掛川市地域では、大勢の人間が集住していたとみられる遺跡はない。和田岡の台地にある遺跡は、広い範囲に及ぶらしいが、密集していたという様子は確認されていない。前節でみたように、この地域では丘陵上や丘の斜面に小規模な集落が多数営まれ、そこではかなり密集した状況が知られている。何か集落どうしを結びつける情報伝達手段があつて、ことある時には瞬時に戦士たちが集結できるような状況になっていたのでもあろうか。

(2) 『魏志倭人伝』と掛川

ア 棺あるも柩無し

弥生時代に入り、米作りが始まったことにより、生産活動や食生活は一変した。墓制にも新しい形が見られる



山下遺跡の第13号方形周溝墓

ようになる。第一節で述べたように縄文時代において人々は、住居の近くに皆等しく素掘りの穴に埋葬されていた。しかし、弥生時代になると方形周溝墓と呼ばれる墓が登場する。これは、周囲に溝を掘ることによって方形に区画し、その内側に多少の盛り土をしたもので、群をなすことが多い。区画する溝は、四隅が切れるものから全周するものまである。亡くなった人は木棺に入れられて、区画された溝の内側中央に掘られた穴に埋葬された。特に木棺に遺体を納める点が、縄文時代の墓との大きな違いである。上の写真は山下遺跡（各和）の第一三号方形周溝墓であるが、その中央の木棺を埋納した穴の両端に、木棺の小口板を立てた痕跡のあることが次ページの写真で分かる。方形周溝墓は、弥生時代前期（約二二〇〇年前）の畿内を初現とし、沖縄、北海道、東北北部を除く列島各地で発見されている。更に古墳時代に



木棺を埋納した穴

も引き継がれ、造られる地域も多い。また周溝のまわりに、木棺には入れられず、そのまま埋葬されたり、溝の中に埋葬された人もいた。また、方形周溝墓以外に集落の一角に墓とみられる穴が掘られ、中にはガラス小玉が副えられていた源ヶ谷遺跡の例もある。こうした縄文時代以来の素掘りの穴に埋葬することも引き継ぎ行われていた。

掛川市内で確認される最古の方形周溝墓は、中期中葉（約二〇〇年前）で、袋井市との境にある各和の山下遺跡で見つかっている。これ以前には当地域には、まだ方形周溝墓というものが伝わっていなかったと推定され、第二節で述べたように中期中葉の原川遺跡では、土器棺が六基確認されているにすぎない。静岡県内をみても同じ状況といえ、中期中葉をさかのぼる例はない。山下遺跡の他、市内でも方形周溝墓の実例は、数多く挙げることができる。中期後葉の例では、不動ヶ谷遺跡（大池）、岡津原Ⅲ遺跡（岡津）、大ヶ谷遺跡（成海）などがある。また中期の終わりから後期にかけては、原遺跡（上西郷）、大六山遺跡（満水）、六ノ坪遺跡（秋葉路）、後期では踊原遺跡（満水）、原新田遺跡（上西郷）、中原遺跡（吉岡）、前坪遺跡（長谷）などが知られている。

先に挙げた山下遺跡は、中期中葉だけでなく後期まで造墓が継続的に行われていることが調査の結果、判明し



群をなす方形周溝墓（不動ヶ谷遺跡）

た。墓の範囲は南北二〇〇メートルにも及んでいる。南から北へ整然と連なり、一辺の溝を共有して造られているものもある。不動ヶ谷遺跡でも、写真のように狭い尾根上に群をなして造られている。ここに葬られた人々は、どこに住んでいたのだろうか。両遺跡とも、この時期に該当する住居跡は発見されていない。さほど遠くない沖積地に人々は住居を構えていたと考えられよう。一般的にこの地域では、中期という時期、集落と少し離れた場所に墓地を選んでいたといえる。こうした状況は掛川市地域に限らないようで、袋井市から浅羽町にかけての小笠山西側の丘陵でも知られている。

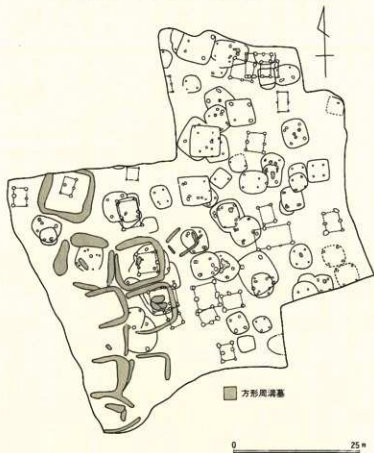
群をなす方形周溝墓が多い中、原遺跡は単独一基で存在し、特異である。またその中期後葉の方形周溝墓は、大きさも二〇メートルと際立って大きい。埋葬施設は五つ認められ、その中には木棺を直に埋葬したものも含まれる。そして二つの埋葬施設からは、碧玉製管玉が出土している。群をなす不動ヶ谷遺跡の方形周溝墓にも管玉を出土する埋葬施設がある。周溝墓の大小の差からもそれを造った家族の格差をうかがうことができるが、副葬品を持つか持たないかによっても、生前のムラの中での階層の違いがあったことが分かる。原遺跡の場合はそれが顕著に表れている例と考えられる。ムラの長なる人物が、他の

人々と区別され埋葬されている。力を働かした人の登場は、ムラの内に階層の差を生じさせた。中期後葉でこのような格差が方形周溝墓に表れているが、後期ではどうだろうか。

後期(約一、八〇〇年前)になると、方形周溝墓は集落の一角に営まれるようになる。浜松市山の神遺跡は、天竜川が形成した沖積地に集落と墓地を営む例である。そこでは一本の溝を境として居住域と周溝墓域が分けられている。掛川市地域の場合には、六ノ坪・源ヶ谷遺跡や踊原遺跡にこういった状況がみられる。六ノ坪・源ヶ谷遺跡は、五〇〇メートルにわたる丘陵上に住居跡や周溝墓を営んでいる。その在り方は、住居跡が集中する地点、住居跡と周溝墓が重複する地点、周溝墓が集中する地点となっている。踊原遺跡は、水田との比高差五〇メートルの丘陵上に位置する。調査地内東側には堅穴住居と掘立柱建物を、西側に周溝墓を営む(図16)。居住区と墓域が重なる部分もある。この両遺跡は、丘陵上に集落が立地している。すべての遺跡がこういった状況ではないが、周辺地域でも同じ現象が起こっている。飛び抜けて大きい方形周溝墓が姿を消し、集落が丘陵上に移ったのは、社会になにか動きがあったのだろうか。

次項で取り上げる邪馬台国について『魏志倭人伝』の中には「其死、有棺無槨、封土作冢」(人が死ぬと、その墓に棺は有るが、槨はない。土をかぶせて塚にする。)と記されている。中国では棺は遺体を納める箱、槨はそれを包む施設のことを指している。方形周溝墓は、周囲に溝を掘って盛り上げた塚に長方形の穴を掘って、遺体を納めた木棺を直に埋葬する。つまり、遺体を納めた棺を包む槨はない。『魏志倭人伝』が伝える「有棺無槨」という墓についての記述は、方形周溝墓を含めた墓の状況を的確に表現しているといえよう。

図16 藤原遺跡のムラの様子（弥生時代後期～古墳時代前期）



先述した原新田遺跡は、集落と墓域を同丘陵上に営んでいるが、その埋葬施設からは鉄剣が出土している。ガラス小玉や管玉といった装身具とはまた別の意味を表す副葬品と考えられる。武器と共に埋葬される例は、県内では最古であり、弥生時代では例がない。集落に環濠をもつことから、社会的に緊張した状況に

あったことを感じとることができよう。

イ 邪馬台国と掛川

『三國志』といえ、魏・呉・蜀三つの国が総力をあけて戦った戦争の物語としてよく知られているが、戦争のことばかりが書かれているわけではない。三國志のうちの『魏書』に、「倭人」のことを記した部分があって、それを一般に『魏志倭人伝』と呼んでいる。『魏書』は、魏の時代に生きた晋の人、陳寿が記した書物であるから、その国が亡びて二〇〇年ほどもたつて書かれた『後漢書』などと違って、大変信頼性が高いといわれている。『魏志倭人伝』は、二〇〇〇字弱という短い文章であるが、当時の倭の国つまり日本の事情を教えてくれる非常に貴重な史料である。

記事の内容は、まず、朝鮮半島にあった植民地帯方郡から女王の都がある邪馬台国への方向と距離、途中の国々に関する官・地勢・戸数・生業等の簡単な記録で始まり、その末尾に「其南有狗奴国、男子为王。其官有狗古智卑狗、不属女王。」（女王国の南に狗奴国があって、男子を王としている。狗古智卑狗という官があり、女王に属しない。）と記す。次に、女王国に関する風俗習慣、生業、産物、社会制度などについての記事が続く。次に、邪馬台国の成立過程と女王卑弥呼に関する記述と外交記事が記され、その終わりに「倭女王卑弥呼、狗奴国男王卑弥弓呼素不和。遣倭戴斯烏越等詣郡、説相攻撃状。」（倭の女王卑弥呼は、狗奴国の男王卑弥弓呼と以前から不和が続いていて、倭の戴斯烏越等を帯方郡に遣わして、攻撃し合う状況を説明してきた。）と述べている。そして最後に女王卑弥呼の死と宗女嚳与を王に立てて、魏に使を出したことを伝えて終わる。

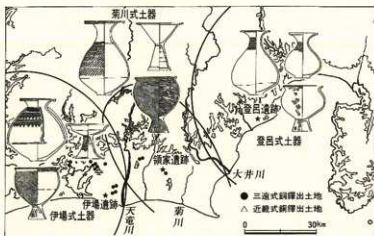
この卑弥呼を女王とする邪馬台国の位置に関しては、古くから九州とする説と畿内とする説とが対立して、決着はまだついていない。ここでは、その問題に一石を投じようというのではなく、掛川市地域の歴史を叙述しようとするときに、この問題をさけて通るのではなく、あえて邪馬台国に関連性を求めると、どんなことがいえるだろうかということを考えようのである。それは、必然的に畿内説に立つことになる。

山尾幸久は、邪馬台国を奈良県あたりに想定し、邪馬台国と仲の悪かった狗奴国^{くぬくに}は、袋井市久能のあたりにあったという説を発表している（山尾幸久『日本古代主権』（形成文庫）一九八三）。また、前沢輝政は、考古学の立場から、先述した三遠式銅鐃の盛行する三河から遠江にかけての地域を狗奴国と考え、『先代旧事本紀』に記される久努国が、狗奴国に当たると説いている（前沢輝政『三遠式銅鐃の流行地域について』『考古学雑誌』四二巻六八号第三号）。

前節の終わりで、この地域の弥生土器の特徴について述べた。それを再度要約すると、器の基本は壺・甕・高坏の三種で、それぞれの割合は大ざっぱに三対四対二程である。甕は、東海地方一円の地域と大差ないが、壺と高坏は大きく異なる。壺には、古い段階では縄文が施され、新しくなると櫛状施紋具を上下で向きを変えて、斜めに突き刺す櫛刺突羽状文に替わる。高坏は、つばを付けた鉢の形の坏が、裾を折り曲げたり施紋したりして飾る脚にのせた形をしている。

こうした特徴をもった弥生土器の一群は、菊川式土器と呼ばれている。菊川流域で注目されたからであるが、分布の中心は掛川から袋井にかけての地域であることが、その後明らかになってきている。菊川式土器は、天竜川から東、大井川から西の遠州平野中東部に分布圏をもっている。長野県南部や大井川以東の同時期には、高坏

図17 菊川式土器の分布図



はほとんど皆無といっているが、菊川式土器の中には二割前後含まれている。しかし、天竜川以西の地域の高坏とは全く違った形をしている。『魏志倭人伝』には「食飲用蓬豆、手食。」（食べた飲み飲んだるのに高坏を用い、手を使って食べる。）と倭の風習を記している。天竜川以西では高坏が三割も含まれていて、形も基本的には九州方面まで共通している。壺の模様には櫛描文と呼ぶ、櫛状器具を器面に押し当てて施した模様が使われ、この模様は近畿地方から瀬戸内沿岸地方にかけての地域で始まり、天竜川まで及んだのである。

もう少し徹視的に見ると、伊勢湾沿岸から天竜川までの東海地方には、同じ櫛描文を使いながら、他地方とは微妙に違うところがあって、広く山中様式と呼ばれ、西遠地域のもはその西遠型（伊場式ともいう）とされているのである。このように土器作りの特徴からみると、菊川式土器は、縄文を使う点では大井川以东と、櫛状具を用い高坏を持つ点では天竜川以西と共通する所はあっても、全体が醸し出す雰囲気は全

く異なり、周囲から孤立的とさえ見えるのである。土器の特徴が何を示しているのかについては、まだ確かな答えはないが、菊川式土器の場合のように直径三〇センチメートルもの広い範囲で、よく似た土器が作られるのは、その地域に住む人々の間に同じような土器を作ろうとした意識があったものと考えられる。

三遠式銅鐸の密集地域は豊川下流と浜名湖沿岸であるが、天竜川以東にも豊岡村敷地で二口、すでに述べたように掛川市長谷で一口発見されている。土器の特徴が孤立的であるからといっても、甕は共通しており、高坏も持つのも同様、銅鐸のまつりも行われるような地域だったのである。

菊川式土器の分布圏内では、特に袋井から掛川にかけての地域で、丘陵上や斜面に中小規模の集落が目立つことについては前節(2)で述べたとおりである。そしてまた注目されるのは、袋井市から浅羽町にかけての小笠山西麓に展開する丘陵地帯に、前項で述べたような方形周溝墓が数十基単位で、密集している点である。墓地の近くに住居跡の存在も知られているが、墓地の数はその比ではない。集落を離れて墓地を密集させたのではないかとさえ思われる。通常弥生時代後期には墓地は集落の一角に墓域として定められるから、これはかなり異常ともいえる状況である。

以上のような考古学の調査成果を、山尾幸久等の説に重ねると、菊川式土器の分布圏が、「狗奴国」の領域に当たるのではないかという結論になる。しかし、問題がないわけではない。それは、この地域を含めて、東海地方には武器らしい武器が見つかっていない。(1)で取り上げた石剣・石槍・鉄剣・磨製石鏃若干というのでは、あまりにも少なすぎる。それにしても、あえてこの地域を狗奴国の領域に想定して、掛川市地域と『魏志倭人伝』の

記事を結びつけようではないか。

『魏志倭人伝』は、本項の初めに引用したように、邪馬台国の南に狗奴国があつて女王に属さないとか、女王と狗奴国の男王とは不和で、戦争があつたと伝えている。天竜川あたりを境にして、邪馬台国軍と狗奴国軍の戦争があつたのかもしれない

(筑波市博物館「古代の筑波」第九回特
別展「日本古代国家の誕生」関連図録)。

